

現代青年の研究（第1報）

アイデンティティと依存性、社会意識、性的態度の関係について

田 端 純一郎

一 序論

現代の若者について描かれた書籍が数多くある。現代の若者の心理的特長の一端を問題として提起している。それらを観ると、「自己決定主義」という価値観を支持し、それがオールマイティになり、ときに、社会的習慣はもとより、法律や規則にも優先する気分があり、さまざまな問題行動へつながる（千石，2001）と指摘するもの。公共空間に出ることを拒絶し、「家のなか」感覚で24時間過ごすライフスタイルになっているがゆえ電車内で平然と化粧したり，ケータイで会話できる（正高，2003）。自己中心性が強く，過大な自己愛を有している（町沢，1998）。他人を見下し，他者軽視，軽蔑をいとも簡単にする（速水，2006）。あるいは，親に依存しながら，楽に生活する状態を一度味わうと，そこから抜け出すことが容易ではなくなった若者の存在（山田，1999）を指摘するもの。結婚まで性経験をしないなんて神話はすでにすたれ，そしてテレクラが出来，出会い系ができ，売春は普通の少女たちのすぐ隣に存在するようになった（高崎，2004）。ゲーム脳人間すなわち，前頭前野の働きが悪くなり，集中力が低

下し、落ち着きがなく、そして攻撃的でキレやすい子どもが増加している（森，2002）とも言う。「今時の若者は……」と嘆くのは大昔からのことであり、何も今にはじまったことではない。しかし、現代の問題は昔や我々の若者の頃と違って、その変化の早さはきわだっていることである。

ある時代のある国の、一千万を越す青年について共通の心理的特質を、科学的に記述することは不可能に近いが、しかも、この記述こそ、青年心理学に対して世人が最も要求するものなのである（西平，1973）。もっとも、青年という語には、三つの異なった視点、青年性・世代性・個別性が含まれている。青年性は青年期という特定の発達段階に入った青年のもっている人類共通の特性であり、世代性とは青年がおかれた歴史・社会的状況の様相によって、青年性がどのようにあらわれるか、すなわち現代日本において、社会階層や特定集団に属する青年という特殊性のなかで現れる特性であり、個別性とは同時代、同一の社会的環境の中で育ったものであっても当然に個人差は見られるが、それを中心に据えた見方である（西平，1990）。我々が現代の青年を論じる時、この視点を混合させてはならないだろう。もちろん、青年性といっても青年期という概念そのものが社会的なものを含んでおり、純粹に成熟という観点からのみ捉えられるものではないが、それでも、世代性の影響の大きなものとそうでないものは区別しなければならない。同時に個別性については新聞やテレビ等マスコミを賑わせる数々の青少年の事件はこの観点を考慮しなければ、誤った解釈におちいる危険性がある。そこから安易に、現代の若者の心性として一般化することは慎まなければならないだろう。

さて、我々が現代の若者という場合、いつの時代の頃からの若者を指しているのだろうか。別な言い方をすれば、今現代の若者に見られる心理的特徴が出現したのはいつ頃からだろうか。日本において社会の大変動、価値の大転換があったのは現代史では1945年であろう。世の中全体がひっくり返ったと言っても過言ではないが、当時の若者が現代の若者の心性に

直結しているとは考えにくい。次に、特に青年にとって大きな価値転換期となったのは1970年頃、つまり70年安保を前にしての学生運動、いわゆる全共闘による大学紛争であろう。それまでの権力や権威を打ち破ろうとして、一部の学生ではあるが過激に反抗した。しかし、結果は権力側に抑え込まれ学生運動家やその心派学生は挫折を味わい、ノンポリと呼ばれた一般学生は結局は何も変わらないと感じ淡い挫折感と共にますます政治や社会に対して無関心になっていった。しかし、又同時に、権威という点から見れば良くも悪くも変化があった。学問や知性、教養といったものに対する見方は変わり、それらが軽んじられる傾向が強くなっていくことになった。この運動の担い手は団塊の世代やその上の世代であったが、運動の終焉により、当時高校生や中学生であった世代を中心に三無主義といわれるもの、無気力、無感動、無責任という心性が広がっていった。この延長線上にいわゆるモラトリアム人間（小此木、1979）、つまり主体的行動をとらず、責任を回避し、社会を傍観する者が多数を占めてくることになった。これが、現代の青年へとつながる先駆であると考えられる。80年代になるとそれまでの世代からは理解不能なものとして、新人類と呼ばれた若者が出現してくる。

また1980年代に入って、青年性そのものまで変化し始めるという、根本構造の動揺という事態が加わった。その理由は、一つは、ハイテクノロジーの水準がこの時期に飛躍的に高まったためであり、もう一つは、＜アブレゲール＞と呼ばれた戦後の世代的変化が顕著に現れて、30年続いてきた時代に当たる。1980年代は日本社会にとってこの青年性そのものが変化し始めた時代である（西平1990）という。そしてそれが今日へと繋がっていると考えられる。

従って、1980年以後の青年の意識がどのようなものか、種々の意識調査の結果を分析することは必要なことであろう。それゆえ、近年に実施された3つの代表的な青年の意識調査を概観する。

中里ら（1997）は1989年と1994年に日本、アメリカ、中国、韓国及びトルコ（1994年のみ）の青年に対し、非行許容性、道德意識、価値観、親子関係、友人関係、日常生活、悩み等について調査を行い国際比較と5年の経年変化を調べている。そこから導かれた若者の問題を以下のように述べている。犯罪許容性は他国に較べて高いとは言えないが、軽い非行の許容性は高く、又、中学生に較べて高校生は2倍も高くなっている。そして、この5年間で大幅に許容的になっている。又、性に対しても非常に許容的であり、特に日本の女子は他国の女子に較べて著しく許容的である。それから、道德意識に欠けるところがあること、自己中心、物質主義などの価値観の歪みがあり、この5年の間に悪い方向に変わっていることがわかった。さらに、日本の若者の価値観は個人生活重視で努力よりも運という外的統制であり現在志向である。親子関係を見ると、日本の中高生は他の国とはことなり、親との関係がうまく言っているという割合が低く、親をあまり尊敬しておらず親から期待されていると感じておらず、親のようになりたいとは思っていない。友人関係については、日本の若者は悩みが多く、その原因は自分自身の社会的スキルや共感性の低さにあることが分かった。学校適応に関しては韓国ほどではないが、学校に行きたくない人の割合は半数ほどで、高校生では過半数を少し超えている。しかし、やや矛盾しているが学校満足度も他国に比べると高くはないが、4分の3は満足している。また、日常生活においては、「夜更かしをしない」ことのように自分をコントロールしたり、約束や時間をまもるというように人との関係をきちんとすることが苦手のようなようであり、「目上の人に丁寧な言葉を使う」ような、伝統的な価値観は崩壊してしまった。そして、自制心に関してみると、日本の中高生は我慢するなど自分を抑えるということが苦手のようなのである。そして日本の若者は悩みが多い方であり、その悩みで目立つのは、受験と自分の性格であるという。

NHK放送文化研究所（2003）は、1982年、1992年、2002年に中学生と

高校生を対象とし生活と意識の調査を行い結果を次のように示している。[ほとんど勉強しない]中学生は1982年の10%から2002年には17%に増え、高校生では25%から41%に増えている。中高生の学校以外の勉強時間はこの20年間で明らかに減少した。それも1992年から2002年の10年間が大きい。また、以前は女子のほうが勉強時間が長かったが、現在の中高生では男女差はなくなっている。勉強の動機づけに関しては、「一生懸命勉強すれば、将来良い暮らしができるようになる」と考えるものは中学生では過半数以上であるが、学年が上がるにつれてその割合は減少し、高校生になるとその割合は拮抗してしまう。また、親の70%もそのようには考えていない。この結果は勉強の動機付けの低下に繋がっていると考えられる。また、人生観については「その日その日を、自由に楽しく過ごす」や「身近な人たちとなごやかな毎日を送る」と答えた中高生が80%近くで「現在中心」「個人生活重視」の考えが多く、「しっかりと計画を立てて、豊かな生活を築く」や「みんなと力を合わせて、世の中をよくする」と答えた中高生は少なく、「未来志向」「共同体重視」の考え方は少数派になっている。そして、子どもにとって親はやさしく、理解があり、よく話す関係にあって、20年前に較べると親は厳しくないと感じるようになっている。一方、親は20年前に較べて子どもがよくわからないと感じるようになっているが、親子の対立は少なくなっている。その背景には親の意識の変化がある、つまり親と子の意識が例えば現在中心の生き方を肯定するというように近づいていること、そして子どもを一人の個人として認め、自主性を尊重するとする親が多くなっていることがある。さらに、親は子どもが自分で思っている以上に、子どもに対する肯定感、肯定的評価をもっている。結局、子どもに社会のルールを教えたり、時には厳しく接することも必要だということは親も感じているに違いないが、それを学校にまかせることによって居心地のよい家庭を維持しようとしていることが窺える。また、友人関係は、中高生にとって大切な存在であるに違いないが、かといってけんかをしたり悩

みを打ち明けたりもあまりしない、やや距離を置いた関係へと、付き合い方の質が変わってきているのかもしれない。また、日本の社会に対しては、良い社会だと思わない中高生が7,80%を占め、急速に増加し、日本の将来は明るいと思わない者も多い。また、中高生の60%近くが子どもでいる方が楽だからというのが一番の理由で、「早く大人になりたいと思わない」という。ところが、90%以上の中高生は、今幸せだと思っており、また学校や家庭を楽しんでいる者が多い。さらに不安な心理状態について「まったくない」と答える者の割合が増加しており、暴力の経験や要求も減少しているという。そして、人の意見に合わせて遠慮するよりも自分の意見を主張するが、人と競うより自分のペースでやるという生き方を選ぶ「マイペース」な考え方が中高生のみならず親にも増加しているという。現状は肯定しないが、不安や不満を引き起こすようなものに対しては、意識的にも無意識的にも目をつぶっていれば今はそれなりに楽しくそれ以上を望まないように思われる。

一ツ橋文芸教育振興会と日本青少年研究所は合同による平成17年度調査事業（2006）で日本、アメリカ、中国、韓国の高校生を対象とした友人関係と生活意識に関する調査を2005年10月から12月にかけて行っている。日本の高校生の一番の関心事はマンガや雑誌、ドラマ、映画、音楽といった大衆文化であり、他国に比べその割合は著しく高い。その他に関心度が高いものに友人関係、将来の進路があるが、これらは他国に比べると低い割合となる。次の順位は、携帯電話や携帯メールであり、ここまでが関心度50%以上であるがこれは他国に比べて高い割合である。逆に他国の学生が高い割合を示しているのに、日本の高校生が30%程度の関心しか示さないものに家族がある。つまり、日本の高校生の特徴を一言で言えば、現在享樂的で、大衆文化、流行やケータイなど最近の通信ツールに捉われており、勉強や家族に無関心である。日本の高校生の悩みは他国に比較して高くないが、50%位が進路や、勉強や成績について悩んでいる。また日本の高校

生の希望があまり多くなく、意欲が低いことは問題としてあげられる。他国の高校生が70%を上回る関心を示す「成績がよくなること」や「希望の大学に入学すること」でも30%程度ときわだって低い。また、「家族が仲良くすること」でも他国に比べ際立って低く10%強である。1位になったのは「クラスのみんなに好かれる生徒」になりたいのであり、他国の高校生が7,80%は支持する「勉強がよくできる生徒」あるいは「自分に課せられたことを確実にこなす生徒」には、それ程なりたいと思わない。また、希望する学歴は、他国の高校生では四年制大学以上を70%強が求めるが、日本の高校生で50%程度であり、特に大学院を希望する学生が他国に比べて少なく7%程度である。そして、「専門・専修学校」の希望者が他国に比べて13%程と多く、いわば「実学志向」である。規律意識を見ると、規律を守るべきだと考えている高校生は50%程度であり、絶対に守らなければならないと考えているのはわずか10%にすぎない。しかし、「自分が間違っていないと思えば、はっきり主張すべき」と考えるものは80%を越し、さらに絶対に主張すべきと考える者が40%である。暴力をふるったりふるわれたりした経験はともに10%程であるが、男女差が大きい。また、親友の数は5人以上が40%であり、親友がいない者は7%であった。親子関係を見ると、父親との関係は他国に比べ希薄であり、あまり父親から期待されていると感じていない。しかし、「父親とよく話す」ことのみが他国より僅かに多かった。母親との関係は父親より関わりが深いが、それでも他国に比べると最低であった。けれども、家庭生活には80%の高校生が満足し、学校生活も70%強の者が満足している。友人関係にも90%弱が満足している。しかし、日本の社会に対しては60%が満足していないのであり、自分自身に対しても60%弱が満足はしていない。そして、77%の高校生は幸福だと感じている。価値観に関しては、意見に賛成ですかと問うスタイルをとっているが、その結果、95%の高校生が「強い意志で自分をコントロールすることは、大切である」に賛成する。そして、90%弱の者が、

「人に負けないように頑張りたい」「将来のために今を頑張って生きたい」という。そして、7,80%の者が、「勉強の時間を保つために、学校や社会の活動にあまり参加したくない」と思わないと答える。しかし、60%強の者は「人並みの生活をすれば十分である」「食べていける収入があれば、のんびりと暮らしたい」とも言う。また、「人にはどう思われても、自分らしく生きたい」と思うものは70%を越えている。そして50%弱の者は「他人のためより、自分のためを考えて行動したい」と答えている。そして報告書では、日本の高校生は「人並み」意識が強く、意欲の少ないことがみてとれると結論づけている。

以上の3つの意識調査では、整合性が見られないような結果もあるが、一般論として知識としてしか考えないことと、自分のことや自分の実際の行動についてのものと、2つの質問の形態に分けて考えると、その違いが説明できるものとなってくるように思われる。そこから見えてくる現代の若者像（青年前期・中期の）は親子関係は一見対立が少なく、話もそれなりにするがそれは子どもの言いなりになる危険性があり子どもの物質的な依存を助長することにもなっている。子どもは親からの期待は感じず、親を尊敬せず、親のようになりたいとも思っていない者が多い。親を厳しい存在としても捉えていない。親の側は子どもを一個の人間とし尊重し、その自主性を尊重するという言葉で厳しさ、しつけを避け、子どもを実際以上に評価し、親子関係の安泰を図っているが、子どもは時に仲良くしようとは考えておらず、他国に比べて関係がやや希薄でうまくいっているとは言えない。友人関係は、若者にとって重要なものと感じているが、やや距離を置いた関係も見られ、親友でも表面的に付き合う人（38%）、時には敵になる人（19%）、時にはいやになる人（17%）でもある。勉強には関心が低下し、大衆文化や携帯に関心を持っている。又、希望も少なく意欲も低いものが多い。それらのことは、勉強をしても、将来よい暮らしができるとは思わないと考えていることが大きい。そして、「現在中心」「個人

生活重視」「自己中心」「物質主義」「外的統制」といった価値観を持ち軽い非行には許容的であり、性についてもそのことは顕著である。自制心については、自分を抑えることは苦手であるが、自分をコントロールすることは大切なことであると建て前では分かっている。そして、日本社会にたいしては良い社会と思わず、満足もしていないが、学校や家庭は、それなりに楽しく、今、自分は幸せであると感じている。そして、マイペースで人生を送り、人並みの生活が送ればよいと考えているようである。悩みは友人関係や進路、学業のことで半数ぐらいにみられ、悩みがないとは言えないが、他国に比べるとその割合は低い。友人関係の悩みの原因として社会的スキルと共感性の欠如があげられており、これは、現代の人間関係のみならず、将来の人間関係にも大きな悪影響を及ぼす問題と考えられる。その原因の多くは過去の人間関係つまり家庭でのしつけの欠如、学校教育がそれを補完出来ていないことに起因するものであろう。

上記のことは中高生の調査から得られたものであるが、大学生を考える上で、重要な基礎的要素となるものであろう。又、最初のさまざまな書籍が指摘している現代の若者の特徴の一端とも矛盾するものでもない。

そして、このような若者の輩出には、現代の若者が直面化している「縁辺化」の問題がある。すなわち「戦後的青年期」の枠組み、安定的な「新規学卒就職」という「学校から雇用への移行」の中で「職業的自立」の道筋、「親からの自立」が成し遂げられ、そこでの格差、すなわち「いい高校⇒いい大学⇒いい社会⇒幸せな人生」というものが若者を社会のメイン・ストリームへと安定的に参入させ、「社会化」する機能をになってきたが、現在は、若者たちが大人への移行期に至っても、彼らの意思とはかわりなく、社会のメイン・ストリームから「排除」されつづけてしまう危険が生じている（児美川，2006）という。このように社会の構造変革から若者の価値意識が現在中心のものになり、「非社会」や「社会参加への意欲が弱まる」ことも認識しておかなければならないであろう。

このように現代の若者の意識の特徴を見てきたが、それらの特徴を世代性、青年性、いかえれば主に社会の価値変化を敏感に取り入れている部分なのか、個々の若者のパーソナリティ発達の中で情緒発達が未熟なままになっている部分と捉えるべきものなのかを考え整理する必要がある。そうすることによって、青少年に対する教育の問題とそれだけでは解決が困難な問題とが分化してくるであろう。

このような視点を絶えず意識していることが必要であるが、今回の研究ではまず最初の一步として青年の精神発達、適応状態との関連を調べるために青年期の重要なライフタスクであるアイデンティティとの関係について分析した。

上記の青年の意識の特徴の中から取り上げるべきものは多くあるが、本研究においては以下のものを取り上げ他は後にゆだねる。すなわち、現代青年の特長が先に示したように顕著にみられると思われる依存性、社会意識（規範意識、身近な事象への関心社会的な事象への無関心、自分の感覚や実感の重視）、性に対する態度を取り上げる。そしてまた、年代による変化の方向についても調べる。

仮説

依存性の高さは個の確立と相反するものであり、従ってアイデンティティの高さと依存性の高さととは逆になるであろう。また依存性は、一見自主性を尊重するように見えるが厳しさを欠き甘やかしが目立つ親の養育態度や、ニートやパラサイトシングルに代表されるような青年の存在から、現代青年では過去に比べて高い傾向を示すことが考えられる。

社会意識に関して、アイデンティティは社会での適応感の指標でもあり、規範意識をベースに持つことはその必要条件である。しかし、社会全体の規範意識に変動が見られるなら、結果として規範意識とアイデンティティは無関係な結果を示すことになるだろう。また、規範意識は軽い犯罪への許容性の増加傾向から見て、過去に比べて規範意識は欠如の方向に向かってい

るだろう。

アイデンティティは社会のなかでの自己の存在を問うものであり、従ってアイデンティティの高いものは社会的事象への関心も高くなるであろう。また身近な事象への関心や社会的事象への無関心については「個人生活重視」であり、「共同体重視」のものが少数派ということから身近な事象への関心が強まっているであろう。

アイデンティティは自分の感覚や実感をその基礎に持つものであるが、アイデンティティ達成の高い人が過度に自分の感覚や実感を重視することはないと考えられる。また、自分の感覚や実感の重視は「自己決定主義」という価値観を若者が支持しているならば、当然高くなるであろう。

性交渉はアイデンティティの面から考えると、アイデンティティの不確かさゆえに肉体の結合でその不安を埋めようとすると考えられる場合もあり、しっかりとしたアイデンティティを持ったもの同士の愛情行為である場合もある。中学生同士であるならば前者を想定すべきであろうが、大学生の場合両方が想定される。従って、性的寛容さや性の道具性とアイデンティティとの関連は明確にならないであろう。しかし、アイデンティティが時間的展望をもち、自己の生き方を規定するものであるから、アイデンティティの高いものは性の責任性も高いものとなるであろう。また、性に対する態度については次のように考えられる。性を結婚とは切り離し、愛情の確認であったり、人間関係を維持するものであったり、欲求の処理や快楽の対象とする傾向が増加しているだろう。

二 方法

1) 対象

神奈川県内の4年制大学の学生(2・3・4年) 184名(男142名, 女42名)

2) 実施方法

下記の質問紙を著者の講義時間に配布し、集団的に施行した。調査

時期は2006年6月である。

3) 質問紙

ラスムッセン自我同一性尺度 (Rasmussen ego identity scale ; 以下 R E I S と略す)

ラスムッセンの尺度の宮下 (1987) による日本語版を用いた。エリクソン (Erikson, E. H.) のライフサイクル (life cycle) の第6段階までを下位尺度とし、そのライフタスクの達成度を求め、その合計得点を自我同一性得点としている。宮下の日本語版では7件法で解答を求めているが、本研究では5件法に修正して用いた。

依存性尺度

辻 (1969) の尺度を用いた。他者に対する依存性を測定する尺度であるが、自己の要求または課題の実現のために他人に依存する道具的依存と、自己の心情的な安定を他人との接触ないし連合そのものに求める情動依存の2つの下位尺度を持っているそれぞれ10項目からなり、4件法による解答が求められる。

社会意識質問紙

久世 (1988) の質問紙を用いた。この質問紙は3つの尺度から成っている。

①規範意識尺度

規範は、多くの者によって共有されている価値基準とその実現のためにとられるべき行為の様式をさし、その規範が内面化されたものが規範意識であるとして、それを測定する11項目から成る。

②自分自身と身近な事象への関心・社会的事象への無関心尺度(以下、身近な事象尺度と略す)

私生活の充実 (享樂的生活)、私的人生観 (趣味に生きる、のんびりした暮らし) 居心地の良さ (快適さ、身のまわりの充実)、他者への関心の低さ、かかわりの拒否、社会的政治的無関心 (自

分の生活にかかわらないことに対して), 無力感, 見通しの無さ(なりゆきまかせ, 安易への傾斜)などをさす.

③自分の感覚や実感の重視尺度 (以下, 自分の感覚尺度と略す)

自分の感情の重視 (好き嫌いの重視, 自分のありのままの気持ちの表出), 人と同じことをしない (目立ち, 個性の尊重), 権利・自由の主張 (他人の犠牲にはならない, 個人の利益の主張), 個人の尊重 (他人からの干渉を嫌う), 利己主義的 (人は人, 自分は自分, 他人のことは気にしない, 人に煩わされない)などをさす.

それぞれ項目から成り, 5件法で評価が求められる.

性的態度尺度

西田 (1992) の尺度を用いた. これは3つの下位尺度, すなわちどれくらい性的に開放されているかをいう性的寛容さの尺度17項目, 性に伴う責任をどれくらい意識しているかをいう性の責任性尺度 (7項目), 性は単なる道具と考え, また人を支配する手段にもなると考えることをいう性の道具性尺度 (4項目), から成っている. 5件法の評価が求められる.

三 結果

表1にREISの平均点及び標準偏差を全被験者と男女別とを示した. 6つの下位尺度及び総得点で男女差を調べたが第6下位尺度 (親密性) で男子より女子の方が高い傾向 ($p < .10$, 片側検定の場合は $p < .05$ で有意差あり) がみられた以外は差がなかった. 表2には宮下 (1987) によるREISの平均点及び標準偏差を示した. 宮下のREISは本来7件法であるが, 本研究で用いた方法は5件法であり, 比較の為に正確な換算にはならないが表1に本研究の平均得点を5分の7倍したものを示した. それによると, 本研究の点数の方が全般にやや低い宮下の点数に近いものを示

表1 ラスムッセンの自我同一性尺度の平均と標準偏差

	全体	男	女		7/5
I 平均 (M)	33.94	33.73	34.64	男女差	47.5
標準偏差 (SD)	(5.58)	(5.77)	(4.88)	n・s t=-0.929	
II M	31.30	31.27	31.38	n・s t=-0.106	43.8
SD	(5.59)	(5.46)	(6.46)		
III M	37.12	36.97	37.64	n・s t=-0.592	52.0
SD	(6.44)	(6.83)	(4.91)		
IV M	38.05	38.41	36.83	n・s t=1.215	53.3
SD	(7.39)	(7.23)	(7.85)		
V M	37.18	37.35	36.62	n・s t=0.596	52.1
SD	(6.92)	(7.00)	(6.66)		
VI M	31.26	30.79	32.86	片側でP<.05 t=-1.909	43.8
SD	(6.21)	(6.27)	(5.81)	両側でP<.10	
総得点 M	208.85	208.51	209.98	n・s t=-0.300	292.4
SD	(28.22)	(28.51)	(27.35)		

表2 宮下 (1987) のデータ

	(全体)
I M	49.19
SD	(6.90)
II M	44.78
SD	(7.97)
III M	54.39
SD	(6.59)
IV M	53.02
SD	(8.83)
V M	54.70
SD	(8.36)
VI M	44.94
SD	(2.45)
総得点 M	301.02
SD	(32.85)

表3 社会意識尺度の平均と標準偏差

	全体 (184)	男 (142)	女 (42)	
規範意識 M	3.53	3.51	3.57	男女差 n・s t=-0.707
SD	0.49	0.46	0.57	
身近な事象 M	3.07	3.06	3.13	男女差 n・s t=-0.695
SD	0.59	0.60	0.59	
自分の感覚 M	3.70	3.70	3.66	男女差 n・s t=-0.401
SD	0.56	0.53	0.64	

表4 久世の (1998) のデータ

	全体 (1210)	男 (832)	女 (378)	
規範意識 M	3.34	3.34	3.34	男女差 n・s
SD	0.42	0.45	1.37	
身近な事象 M	2.91	2.95	2.83	男女差 p<.001
SD	0.49	0.50	0.45	
自分の感覚 M	3.67	3.69	3.64	男女差 p<.05
SD	0.39	0.40	0.36	

本研究と久世との比較

	(全体)	(男)	(女)
規範意識	p<.01 t=5.882	p<.01 t=4.146	p<.01 t=3.577
身近な事象	p<.01 t=4.010	p<.01 t=13.86	p<.01 t=3.949
自分の感覚	n・s t=0.910	n・s t=0.261	n・s t=0.309

している。表3には社会意識尺度のそれぞれの下位尺度の1問当たりの平均点及び標準偏差を全被験者と男女に分けて示した。男女差についてはいずれの下位尺度でも有意な差はなかった。表4には久世（1998）の結果を示した。そこでは、身近な事象と自分の感覚で男子の方が女子よりも高いという有意な差がみられており、本研究とは違った結果を示している。表4の下部に本研究と和田のデータの比較結果を示した。規範意識尺度と身近な事象尺度でどの被験者群でも本研究の方が和田の得点よりも高いという有意差を示した。自分の感覚については差がなかった。表5には依存性尺度（総得点）とそれぞれの下位尺度の平均点と標準偏差を示した。男女

表5 依存性尺度の平均と標準偏差

		全体	男	女	
道具的依存	M	15.37	15.32	15.55	男女差 n.s t=-0.302
	SD	4.33	4.22	4.73	
情緒的依存	M	16.65	16.34	17.72	男女差 p<.05 t=-2.310
	SD	3.43	3.10	4.25	
依存性(合計)	M	32.10	29.60	33.30	男女差 n.s 片側 p<.10 t=-1.573
	SD	6.13	5.72	7.23	

表6 辻（1969）のデータ

	男
道具的依存 M	10.4
情緒的依存 M	15.3
依 存 性 M	25.7

表7 性的態度尺度の平均と標準偏差

		全体 (184)	男 (142)	女 (42)	
寛 容 さ	M	2.50	2.61	2.15	男女差 p<.0001 t=3.963
	SD	0.69	0.71	0.48	
責 任 性	M	4.37	4.30	4.61	男女差 p<.001 t=-3.423
	SD	0.54	0.57	0.37	
道 具 性	M	2.98	3.94	2.78	男女差 { 片側 p<.05 両側 p<.10 t=1.684
	SD	0.89	0.86	0.98	

差は、情緒的依存で男子より女子のほうが高い（ $p < .05$, $t = -2.31$ ）という有意差がみられた。表6には辻（1969）の結果を示した。辻のデータは平均のみであり、統計的意味は問えないが、男子の道具的依存の点数

表8 和田（1991）のデータ

	全体 (250)	男 (118)	女 (132)	
寛容さ M	2.46	2.91	2.05	男女差 $p < .001$ で有意
— SD	—	0.73	0.51	
責任性 M	4.42	4.35	4.48	男女差 $p < .05$ で有意
— SD	—	0.54	0.44	
道具性 M	2.64	2.73	2.51	男女差 $p < .10$ で傾向
— SD	—	0.74	0.59	

本研究と和田との比較

	(男)	(女)
寛容さ	n·s $t = -1.18$	n·s $t = 1.12$
責任性	n·s $t = -0.72$	$p < .05$ $t = 2.25$
道具性	$p < .01$ $t = 3.07$	片側 $p < .05$ 両側 $p < .10$ $t = 1.75$

表9 社会意識，依存性，性的態度についてのREISの高群と低群での比較

	高群	低群	
規範意識 M	39.06	38.45	n·s
SD	5.45	5.26	
身近な事象 M	31.48	36.36	$p < .001$ $t = -5.42$
SD	5.47	6.70	
自分の感覚 M	41.25	39.99	n·s 片側で傾向
SD	6.43	5.69	
道具的依存 M	13.42	17.54	$p < .001$ $t = -7.30$
SD	3.82	3.82	
情緒的依存 M	16.61	16.70	n·s
SD	3.64	3.21	
依存性 M	30.05	34.13	$p < .001$ $t = -4.87$
SD	6.10	5.30	
性的寛容 M	43.29	41.77	n·s
SD	11.23	12.41	
性の責任性 M	31.06	30.02	片側 $p < .05$ $t = 1.86$ 両側 $p < .10$
SD	3.54	4.03	
性の道具性 M	11.78	12.09	n·s
SD	3.50	3.66	

で大きな違いが見られる。表7には性意識尺度のそれぞれの下位尺度の一回あたりの平均点及び標準偏差を全被験者と男女別とを示した。男女差については、寛容さ ($p < .001$, $t = 3.96$)、と責任性 ($p < .001$, $t = -3.423$) で0.1%水準で有意差を示した。又、道具性も傾向 ($p < .10$, $t = 1.68$, 片側の場合は $p < .05$ で有意) がみられた。表8には和田 (1991) の結果を示した。本研究と同じく寛容さ責任性で男女に有意差がみられ、道具性で傾向 ($p < .10$) が認められた。本研究と和田のデータを下位尺度ごと男女別に比較した結果を表8の下部に示した。責任性の女子 ($p < .05$, $t = 2.25$) と道具性の男子 ($p < .01$, $t = 3.07$) で有意差がみられ本研究の点数のほうが高かった。又、道具性の女子でも本研究の点数のほうが、高い傾向 ($p < .10$, $t = 1.75$; 片側では $p < .05$, 有意) がみられた。表9には、REISの高群と低群に分けた社会意識尺度、依存性尺度、性的態度尺度のそれぞれの下位尺度の平均点及び標準偏差を示した。高群と低群との比較において、社会意識尺度においては、身近な事象尺度で高群のほうが低群より優位に低かった ($p < .001$, $t = -5.42$)。依存性尺度では、道具的依存 ($p < .001$, $t = -7.30$) と全依存性 ($p < .001$, $t = -4.87$) で高群のほうが低いという有意差があった。性的態度尺度では性の責任性において高群のほうが高得点を示す傾向 ($p < .01$, $t = 1.86$, 片側で $p < .05$) があった。そこで、上位下位3分の1での比較をすると、有意な差 ($p < .01$, $t = 2.93$) があった。

四 考察

自我同一性に関する性差は当然予測されるもの (宮下, 1987) であるが、第6尺度の親密さを除いて有意な差はなかった。このことは、女性の同一性形成の過程は男性のそれとは異なる (Erikson 1968) と考えられた時代の女性の生き方と、現在のように、必ずしも女性が結婚し、子を産み育てると言った生き方よりも生涯独身であってもかまわないと考える時代で

は、非伝統的女性（Oconnell 1975）のように同一性形成の過程も変化し、男性のそれに近づいているとも考えられる。女性のサンプル数の追加、及びもっと広範囲からのサンプル収集を行う必要があると考えられる。親密性のみ女性が男性より高い（片側、 $p < .05$ ）有意差を示したのは、アイデンティティ発達のある一定のレベルは、男性においては親密性のレディネスよりも先に起こらねばならないが、女性においてはそのレディネスはアイデンティティを最初に手探りしている状態よりも先に起こるか、あるいは共存している（Hodgson, al. 1979）、女性的な性役割志向の強い女性はアイデンティティの問題と親密性の問題を同時に処理していく（Kroger 2000）ので、青年後期では平均すれば女性の方が親密性は男性より高くなることが予測されることによる。この女性のアイデンティティ形成の様式を女性にのみ適用するのは問題がある（杉村、2005）との指摘があり、男女に適用されるべきであるのはその通りであろうが、それでもなお、個人内領域と対人関係領域のどちらにより重きを置くのかは男女差があると思われる。検討を要する問題であるが、今回の結果はその差の観点から説明がつくであろう。

社会意識尺度ではすべての下位尺度で男女の有意差は見られなかった。久世のデータでも規範意識において男女差はなかったが、本研究との比較ではすべての被験者で、約10年前の和田の結果に比べて本研究の方が有意に高い点数を示した。このことは、「自己決定主義」（千石、2001）や、青年の意識調査（中里、1997）のデータとは異なった結果を示している。これは調査対象の問題なのか、この10年間に青年の規範意識に変化があったと考えるべきなのか問題である。しかし、私立大学生の方が国立大学生よりも規範意識が有意に高い（久世、1988, 1987, 1986）との報告があり、久世のデータにはその国立大学生が被験者の約3分の1を占めている。その差の理由として、入学してくる学生自身の相違に求められる部分と入学してからの大学の学風に影響される部分の両方が考えられる（久世1988）

と述べている。このことは本研究の被験者にも当てはまると考えられる。特に規範については大規模な大学に比べて日頃からやや厳しく指導されており、又、授業中での調査ということも影響しているのかもしれない。身近な事象に関して、男女差は本研究では見られなかったが、久世の結果では男子が女子よりも有意に高い結果を示していた。又、本研究と久世のデータとの比較では、すべての被験者群で本研究が有意に高く、個人生活重視の価値観（中里，2003）、「家のなか」感覚で24時間過ごすライフスタイル（正高2003）などとも合っており、ますます社会への無関心、身近な事象への関心の増加が進行していることの結果とも考えられる。自分の感覚に関しては本研究、久世のデータとも男女に有意差はなく、又、本研究と久世のデータの比較においても有意差はなかった。しかし、両データとも3.6～3.7という高い得点を示しており、大多数の大学生が自分の感覚や実感を重視していると考えられ、それはすでに少なくとも20年前からのことと言えるだろう。「自己決定主義」（千石，2001）の若者はかなり以前から青年期の広い年齢層で大多数派であったのであろう。

依存性尺度に関しては情緒的依存性で男子より女子が有意に高かった。情緒的依存とは心の安定を情緒的人間関係に求めるものであり、性役割に性差が少なくなる傾向が今日では強いが、やはりまだ過去の女性性、表出性が健在しているものと考えられる。又、辻のデータは団塊の世代が青年期のもので、しかも男子だけのものであり、標準偏差も示されていないが、本研究の被験者と道具的依存で大きな差が見られる。本研究の被験者の得点の高さが際立っている。パラサイトシングルやニートのような極端なものも含めて現代の大学生が自己の要求などの実現のために他人に依存する傾向が明らかであると考えられる。

性的態度尺度では、すべての下位尺度で男女差があり、寛容さは男子が有意に高く、責任性は女子が有意に高く、道具性は男子が片側検定で有意に高かった。和田のデータでも全く同じ差異があり、すべて有意であった。

すなわち、女性より男性の方が性に寛容であるが、男女とも5段階評価のニュートラルポイントである3点を下回っており、現代青年も性に対して寛容とは必ずしも言えないのかも知れない。又、これに関しては和田のデータとの間に有意差はなく約15年前と変わっていない。しかし、日本の若者の性意識は近年に性行動を許容する方向へと大きく変化し、特に女子も男子とあまり変わらない（中里、1997）という。性行動に関しては彼らなりの制約、例えば、愛情の存在の重視等、愛情を確かめるものであるというのが、男子67.7%、女子74.7%（斉藤、2006）があるが、実際の性交経験率をみれば男子大学生では1984年47%、1993年57%、1999年63%（日本性教育協会 2001）2002年81%（斉藤 2006）、女子大学生では1987年27%、1993年43%、1999年50%、2002年61%と経験率は上昇している。彼らの言う愛に基づく性行動には許容性が高いのだろう。性の責任性に関しては両データとも女子が男子より高かったが、これは男女の性行動に伴う危険性は生物としての構造上はもちろん、過去に比べれば減少したとは言え、社会的な問題も女子に高いことから、当然考えられる結果であろう。和田のデータとの比較においては、本研究の女子が和田の女子よりも有意に高かった。これは女子が彼女らのいう愛のある相手との性行動を現実のものと考えるがゆえに、より責任を求めるようになってきているのか、被験者の問題なのかは断言出来ない。道具性については男子が女子より有意（片側）に高かった。和田のデータでも男子が女子より有意に高い。又、和田のデータとの比較においては本研究の方が有意に高かった（ただし女子は片側）。このことは、男性の方が女性より性を道具と考え、現代の青年の方が15年前の青年より性を道具と考えるようになってきていると考えられるが、これは性行動を愛情関係の不可欠の一部として定着している者の増加という点からもうなずける。性交は快楽を得るものと考えているものが男子、42.9%、女子、20.4%である（斉藤、2006）ことから理解できる。性の責任に関して、ニュートラルポイントを本研究の男子のみがわずかに

上回った(3.04)が、他はすべて下回っている。

このように、性的態度尺度の結果を見る限り、性行動はマスコミ等言われている程乱脈ではないように見えるが、しかし一方で大学生の性交経験率は男性63.5%、女性50.3%（矢田，2001）であり、又、男性80.8%、女性60.2%（斉藤，2006）との報告もある。今回の結果は現状をうまく把握しているとは言えないかもしれず、尺度の是非も含めて吟味しなおす必要があるのかもしれない。

R E I Sの高群と低群での差は社会意識尺度の各尺度においては、身近な事象の点数の高群が低群より有意に低かった。同一性達成度が高ければ、他者や社会を信頼し、その社会の中で有用な人間として適応的に活動し充実感を持って生きることになるのであり、身近な事象の点数が高いことは妥当な結果と考えられる。依存性尺度に関しては全依存性と道具的依存で高群のほうが低群より有意に低かった。R E I Sの高群は自律的で個として確立し社会の中で有能に活動するのであるから、依存性が低くなるのは当然のことと考えられる。しかし、道具的依存ではそのことがはっきりするが、親密さとも関連すると思われる情緒的依存に関しては、差が見られなかった。性的態度尺度に関しては、性の責任性が片側検定で高群が低群より有意に高かった。自我同一性の達成度が高ければ、自分の行動について確信を持ち、結果についても自己との関わりにおいて責任を感じることになるであろう。従って、性行動においても同じであり、高群が低群より責任性が高いという結果は当然のことと考えられる。

五 まとめと展望

現代青年の依存性は30年余り前に比べると予測どおりに高かった。特に道具的依存は非常に高かった。また、アイデンティティの達成の水準と依存性の高さとは逆になるという仮説も検証されたが、情緒的依存については有意差がなかった。規範意識が過去に比べて欠如の方向に向かっている

という予測は確かめられなかったのみならず予測と反対の結果になった。規範意識とアイデンティティは無関係な結果を示すだろうという仮説は確かめられた。身近な事象への関心・社会的事象への無関心が過去に比べて高まっているだろうという予測は確かめられた。アイデンティティの高いものは社会的事象への関心が高くなるという仮説も検証された。自分の感覚や実感の重視は現代の若者が過去に比べて高くなっているという予測は誤っていた。8年前と変化が見られなかった。また、アイデンティティの高い人が自分の感覚や実感を過度に重視することはないだろうという仮説は検証されなかった。性の寛容さが増しているだろうという予測は認められなかった。しかし、性の道具性は15年前に比べて増加しているだろうという予測は支持された。青年後期のアイデンティティと性的寛容さや性の道具性とは関連がないであろうという仮説、およびアイデンティティの高いものは性の責任性も高くなるであろうという仮説は支持された。

経年比較では尺度開発者のデータを使用したもので、尺度によってその年代がばらばらにならざるを得なかった。しかし、過去との比較はおおまかには捉えられた。今後は同じ種類の被験者で継続的に比較することでよりはっきりとした変化が捉えられ意味づけが可能になるであろう。

また、広い範囲の被験者を集めより平均的な若者の分析も今後の課題であろう。

アイデンティティに関しても今日ではエリクソンらのいう従来型のアイデンティティではなくネットワークアイデンティティ（河合1998）、自己アイデンティティを考えるうえでの自己の多元化（浅野2005）という変幻自在なアイデンティティをも考慮する必要もあるであろうが今回はその問題には触れなかった。今後、検討しなければならないと考えている。

引用文献

- 浅野智彦 2005 物語アイデンティティを越えて? (上野千鶴子編 2005 脱アイデンティティ 劉草書房) p77-101
- Erikson, E. H 1968 Identity : Youth and crisis. W. W. Norton. (岩瀬庸理訳 1973 アイデンティティー青年と危機—金沢文庫)
- Hodgson, J. W. and Fisher, J. L. 1979 Sex Differences in identity and Intimacy Development in College youth J. of Youth and Adolescence, 8, 37-50
- 速水敏彦 2006 他人を見下す若者たち 講談社
- 一ツ橋文芸教育振興会, 日本青少年研究所 2006 高校生の友人関係と生活意識調査報告書 日本青少年研究所
- Kroger, J. 2000 Identity Development : adolescence through adulthood Sage Publications, Inc. (榎本博明編訳 2005 アイデンティティの発達—青年期から成人期 北大路書房)
- 河合隼雄 1998 日本人の心のゆくえ 岩波書店
- 児美川孝一郎 2006 若者とアイデンティティ 法政大学出版局
- 久世敏雄 和田実 鄭曉斎 浅野敬子 後藤宗理 二宮克美 宮沢秀次 宗方比佐子 内山伊知郎 平石賢二 大野久 1988 現代青年の規範意識と私生活主義について 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科 —35, 21-28.
- 久世敏雄 宮沢秀次 二宮克美 和田実 後藤宗理 浅野敬子 宗方比佐子 大野久 内山伊知郎 鄭曉斎 1987 現代青年の社会意識に関する研究 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—34, 25-39.
- 久世敏雄 宗方比佐子 和田実 後藤宗理 浅野敬子 宮沢秀次 二宮克美 大野久 内山伊知郎 鄭曉斎 1986 現代青年の社会意識 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—33. 291-302.
- 高崎真規子 2004 少女たちはなぜHを急ぐのか 日本放送出版協会
- 正高信男 2003 ケータイを持ったサル 中央公論新社
- 町沢静夫 1998 「自己中心性」の病理 双葉社
- 宮下一博 1987 Rasmussenの自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究35, 253-258
- 森 昭雄 2002 ゲーム脳の恐怖 日本放送出版協会
- 中里至正 松井 洋 1997 異質な日本の若者たち ブレーン出版
- NHK放送文化研究所 2003 NHK中学生・高校生の生活と意識調査 日本出版協会
- 日本性教育協会 2001 「若者の性」白書 小学館

- 西平直喜 1990 成人になること 東京大学出版会
- 西平直喜 1973 青年心理学 共立出版株式会社
- Oconnell, A. N. 1975 The relationship between life style and identity synthesis and resynthesis in traditional, neotraditional, and nontraditional women. *Journal of Personality*, 44, 675-688
- 小此木啓吾 1978 モラトリアム人間の時代 中央公論社
- 斉藤和佳子 中野朋美 芝木美沙子 笹嶋由美 2006 大学生の性意識と性行動の実態調査 北海道教育大学紀要（教育科学編）56, 47-61
- 千石 保 2001 新エゴイズムの若者たち PHP研究所
- 杉村和美 2005 女子青年のアイデンティティ探求 風間書房
- 辻 正三 1969 「依存性テスト」の検討 東京都立大学人文学報 67, 11-23
- 和田 実 西田智男 1991 性に対する態度および性行動の規定因（I）—性態度尺度の作成— 東京学芸大学紀要第1部門（教育科学）42, 197-211
- 山田昌弘 1999 パラサイトシングルの時代 筑摩書房